宗像

▲浦安舞を奉奏

沖津宮・中津宮春季大祭

～筑前大島で、五穀豊穣と豊漁を祈念～

四月三十日、五月一日の両日（旧暦の三月十四・十五日）、宗像大社沖津宮・中津宮両宮の春季大祭が、筑前大島の中津宮で斎行された。

大祭の諸準備には、数日前より沖・中両宮奉賛会（会長＝古賀理）、同敬神婦人部（部長＝河辺恒子）、並びに同翼賛会（会長＝上野美実氏）に御奉仕頂き、各祭場の清掃、社殿の装飾等装いも整えられた。

四月三十日午後三時より中津宮地主斎行、同五時生憎小雨がパラつく中ではあったが、島の北側にある沖津宮遥拝所、中津宮で宵宮祭が各々斎行された。終了後には中津宮社務所で、明日の打ち合わせを兼ねながら、一同で直会を行った。

五月一日大祭当日は、心配された雨もなんとか持ち応え、奉仕員、参列者一

▲中津宮本殿（県指定重文）

6月祭事暦

毎月1・15日 月次祭（つきなみ）

午前10時
- 高宮祭
- 第二宮・第三宮祭
- 引き続き
- 宗像護国神社
  - 月命日祭（1日）
  - 巡　　拝（15日）

午前11時～
- 総社祭
  - 浦安舞奉奏（1日）
  - 豊栄舞奉奏（15日）

余滴

最近、結婚専門誌等で和風が見直され、和式による結婚式の特集がくまれ話題になっている為か、神前で結婚式を挙げる人が増加しつつある傾向にある。また、芸能人の中でも神社で結婚式を挙げ和式ブームとなっている。神前で行う結婚式の歴史はそう古いものではなく、明治三十三年に皇太子であった大正天皇が、皇居内の賢所で神前結婚式を挙げた。その皇太子の結婚を記念して、東京大神宮が神社の施設を一般の人の結婚の為に提供したのが始めとされている。一時は結婚式といえば神前結婚式であったが、ホテルが出来、また欧米化の影響で利用者の意識が変わり、ウエディングドレスを着、バージンロードを歩きたいなどの要望が多くなり、キリスト教の教会で行われようになった。それ以前の結婚式は現在ほど派手さはなく、大部分は家庭の床の間ある座敷で行われ、夫婦となったことを祖先或は氏神に報告し、家族、親族、地域社会の関係者に披露することが中心であった。結婚の形は時代とともに変遷し、そのありようも多種多様であるが古き良き日本の伝統を踏まえた神社で「神結び」、永遠の契を神に誓いあうこの姿にこそ、限りない日本民族の発展に繋がるのではないであろうか。（Y・S）

神具・装束　結婚式場調度品
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
井筒 本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家　匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025　電話(0940)32-2567

同各祭場に別れ、午前八時半より宮崎区の厳島神社で、同九時からは沖津宮遥拝所、同九時半より大島最高峰の御嶽山に鎮座する御嶽神社でそれぞれ春祭りが斎行された。

同十一時からは、島内外より多数の参列者が続々と参集する中、中津宮春季大祭が始まり、神饌と共に島民の真心からなる海川山野の献品・献魚が供えられた神前で、宮司が祝詞を奏上。続いて島民を代表し氏子奉幣使田志覚氏が奉幣詞を奏上された。そして巫女による「浦安舞」も優雅に奏され、宮司以下各界各層の代表者が玉串を奉り、祭典は滞り無く終了した。祭典後には昨年度の献品・献魚奉納者に感謝状が宮司より贈呈された。

午後一時からは、神賑行事として大島小学校児童全員参加による奉納相撲大会が、本殿横の土俵で開催され、境内には大きな歓声が響き、一層の賑わいを見せていた。

大島での春秋大祭をはじめ各祭典、諸行事は全島挙げて行われている。当日も巻網船団の出漁を間近かに控え、活気に溢れる中、五穀豊穣と豊漁を祈る沖・中両宮春季大祭は盛大裡に終了した。

五月・浜宮祭

～雨天により、五月寮で斎行～

端午の節句の五月五日、江口の釣川河口にある当大社五月寮で、五月・浜宮祭が斎行された。

例年この日だけは天候に恵まれ、市内神湊の浜宮、同江口の五月宮の祭場で斎行されてきたが、本年は予報通り祭典時刻が近付くにつれ、強い雨が降り出し、当大社五月寮内での斎行となった。

定刻、神島宮司以下奉仕員は五月寮に出向。五月寮の一室に祭壇を設置し、海川山野の味物（たべもの）に加え、「赤飯」「粽」「ガメの葉饅頭」「菖蒲酒」など五月祭ならではの神饌をお供えし、午前十一時より斎行。

当大社責任役員、氏子会、地元総代をはじめ神湊・江口両地区自治会長をはじめ地元の方が多数参列した。

祭典後、同所で直会が催され、神島宮司より五月・浜宮祭の由緒を交えた挨拶があり、参列者一同連綿と受継ぐことの大切さを感じつつ菖蒲酒で乾杯。楢の若葉が敷かれた折敷に盛られた赤飯・ガメ煮・膾（なます）・粽を古式ゆかしく栗箸でいただきながら、神人和楽の一刻を過ごした。

稲の成長を予祝する神事でもあるこの五月・浜宮祭が終ると、神郡宗像では田植えの準備が始まり、一面の水田に早苗が影を浮かべながら夏へと木々も緑を深めていく。

宗像大社菊花会 玄海小学校に菊資材を贈呈

ゴールデンウィーク明けの五月八日、地元玄海小学校体育館で、宗像大社菊花会（会長＝千々和正信）から、菊作りの肥料や植木鉢、消毒剤などの資材贈呈式が行われ、当大社の神職・巫女から児童代表へ菊作り資材が手渡された。

同校では、毎年児童の情操教育の一環として、教諭、児童、PTAが一丸となって菊作りに取り組んでおり、当大社もその一助になればと平成十二年より協賛し、今年で八年目となる。

同校の菊作りには、ボランティア団体「匠の会（会長＝大森正史氏）」も指導にあたり、低学年の児童は小菊の栽培を、高学年の児童は専門家でも困難な「大輪三本仕立て」に挑戦している。

資材を受け取った児童は「ありがとうございます。皆で努力し頑張って綺麗な花を咲かせます。また、匠の会の皆様もご指導お願いします。」と御礼の挨拶を行った。

馥郁とした菊花薫る秋には校内菊花展が開催されると共に、当大社境内で開催される西日本菊花大会にも展示するばかりでなく、地元の各施設にも飾られており、児童たちが丹精込めて育てた菊が、どの様な花を咲かせるか今から楽しみである。

玄海未来塾 宗像大社氏子青年会 現地大祭に向けて沖ノ島で清掃奉仕

四月二十四日、宗像大社氏子青年会（会長＝小林栄二氏）及び、地域町おこしボランティア団体「玄海未来塾（会長＝小林正勝氏）」による沖ノ島清掃奉仕が行われた。

この行事は、五月二十七日に斎行の沖津宮現地大祭を前に、毎年実施され本年で八回目を迎える。

今年の奉仕には二十五名が参加、午前八時に共進丸（船長＝宗岡譲氏）で鐘崎港を出港した。当日は波が高く二時間以上をかけて沖ノ島に到着。数名はすでに疲労気味であったが、一同直ちに海水で禊を行い沖津宮へと向かった。先ず本殿で奉告祭を行い、氏子青年会長、未来塾会長が玉串を捧げた。

その後、早速清掃を開始。本殿の屋根に溜った枯葉を落とし、台風で倒れた大木を除去、海岸一帯のゴミを拾い集め、草刈りを行うなど、平素神職一名のみでは作業が困難な箇所を、約二時間に亘り頂いた。

作業後には、一同清々しい気持ちでの直会を波止場で行い、島を一周してから帰路につき、夕刻には鐘崎港に無事到着、本年の清掃奉仕を終えた。

▲奉告祭後、作業の説明を受ける参加者一同

▲作業後の波止場での直会

平成十九年度 宗像大社奨学金受給生奉告祭

～受給生は延べ七五五人に～

四月二十九日昭和祭で賑わう御本殿で、平成十九年度宗像大社奨学金受給生奉告祭が斎行され、本年度の受給生六〇名が御神前に集った。

当日は、今春入学した新受給生二〇名を含む、宗像・福津両市内より選定された生徒六〇人が保護者とともに参集。午前十一時からの昭和祭に参列後、拝殿に昇殿し奉告祭が斎行され、一同有為な人材になるよう勉学に勤しむことを御神前に誓った。

祭典後は清明殿で選定書授与式と説明会が行われ、神島宮司から宗像大社奨学金選定書が生徒代表に授与され、担当神職よりこの奨学金の歴史、制定目的、規定、受け取り等についての説明が行われた。

その後、生徒一人一人がテーマに沿った作文を執筆し、書き終えた生徒から第一回目の奨学金支給を受け、境内をあとにした。（この作文は『奨学金受給生便り』として紙面で掲載する予定です。）

当大社の奨学金制度は、昭和三十四年の今上陛下御成婚を奉祝して制定され、翌年の昭和三十五年第一期生として宗像市・郡内の中学校出身者（当時は六中学校）に支給され今日に至っている。現在では宗像・福津市内十中学校より各校二名づつ選定し三年間支給しており、今春の新受給生二〇名で延べ人数は七五五人にのぼる。

『郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成』（宗像大社奨学金受給生規約より）の制定の趣旨にそった社会人になることを切望する。

宮司より選定書を受ける新受給生代表

新受給生一同昇殿しての奉告祭

説明会後の作文執筆の様子

第四十八期新奨学生二〇名

宮本 愛（大島中卒）
河辺 杏莉（〃）
大谷 立（玄海中卒）
田志真衣子（〃）
牧 怜弥（日の里中卒）
平野 叶恵（〃）
山田 直樹（宗像中央中卒）
天野 由里（〃）
濵田 豊（城山中卒）
石川 翠佳（〃）
明石 大樹（河東中卒）
藤原 敬汰（〃）
久保 誠（自由ヶ丘中卒）
占部 愛（〃）
奥村 祐弥（津屋崎中卒）
上妻 理絵（〃）
友 千明（福間中卒）
大庭 美咲（〃）
脇野絢史朗（福間東中卒）
渡邉 麻美（〃）

神宝館休館のお知らせ

展示替えの為、左記日程で三日間休館致します。

ご迷惑をおかけ致しますが、ご理解の程よろしくお願い申し上げます。

●●●●●●● 休館日 ●●●●●●●

平成十九年
六月十二日（火）～
十四日（木）

宗像大社神宝館

沖ノ島 沖津宮新社務所完成

～台風十三号の被害により、三十二年振りに建替え～

昨年九月十七日、大型の台風十三号が玄界灘を縦断し沖ノ島を直撃、その際の大風で沖津宮社務所の屋根が吹き飛ばされ、社務所が使用不能となる被害を被った。

完成した新しい社務所

早速、緊急対応を行うと共に、各関係者と協議を重ねた結果、飯塚市の「みぞえ住宅」及びNTTドコモ九州のご協力を得て、建替え工事を行うこととなった。

同島にはNTTドコモの携帯電話基地局が設置されており、玄界灘海域の電話通信の要として海上の安全を担っているが、基地局の設置については「みぞえ建設」が関わっており、両社のご協力を得ながら同宮社務所修復に携わって頂く事となった。

社務所の内外を清祓

四月初旬に着工、年に一度斎行される沖津宮現地大祭の完工を目途に、急ピッチで工事が進められ、両社の絶大なるご支援のもと、昭和五十年に竣工して以来三十二年振りに新社務所が完成した。

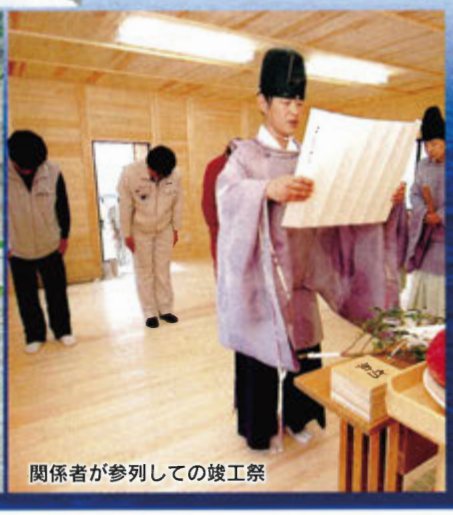
新社務所の規模は、昭和五十年に竣工した旧社務所同様で約八〇㎡だが、間取りや模様を変更し、快適な勤務が出来るよう装いも新たになった。

また、現在は自家発電で社務所の電力を使用しているが、将来的にはソーラー発電を目指し、環境に配慮した仕様となっている。

四月初旬に解体され、基礎部分のみとなった旧社務所

周知の通り、沖ノ島は神職がたった一人で勤務する島のため、工事関係者の方には長期間家族のもとを離れ、狭い仮設住宅での暮らしを強いられたり、資材の運搬も大型クレーン船やヘリコプターでの搬入、さらに海上の天候にも左右され、差し迫る工期でも苦労されたようであった。懸命に社務所修復を行った皆様には、心より感謝申し上げます。

横からみた社務所。サイズはほぼ同じ。


関係者が参列しての竣工祭

宗像大社は「挑戦する保守」ありむら治子さんを応援します

参議院議員　比例代表（全国区）

ありむら　治子

神道政治連盟推薦（自由民主党）

「神道の精神を国政に、日本の心を政策に」をスローガンに、全国約八万社の神社関係者の支援のもと、様々な国民運動を展開している団体が神道政治連盟（略称＝神政連）です。

その神政連が、推薦する候補が自由民主党公認の「ありむら治子」氏で、宗像大社も同氏を応援しています。

同氏は平成13年の参議院議員選挙で初当選の後、5年半の間、日本の国柄を護るため、「昭和の日」制定や、領土問題に関する教科書記述の正常化などに、積極的に取り組み、成果を出されています。中でも「教育は国民性を創る礎」という信念のもと、平成17・18年には小泉内閣で文部科学大臣政務官として、教育基本法改正に取り組んでこられました。

政治的スタンスは「挑戦する保守」で、しっかりとした国家観と地に足のついた生活観を併せもって課題解決を図ることを心がけ、歴史に学び、先人から受継いだ知恵を、未来に向かって活かそうとする気概を持ち、また育児をする生活者としての実感を加え、無党派の方々にも安心して共感される政治を志しておられます。

また、全国47都道府県が選挙区である為、国会での予定がない日は、日々新幹線や飛行機、電車を乗り継いで、全国各地を駆け巡り、多くの方々とひざを交えた対話を重ねておられます。

ありむら治子	
選挙区	比例代表全国区 （北海道～沖縄まで全国47都道府県）
生まれ	昭和45年
出身	滋賀県出身（石川県生まれ、ルーツは鹿児島県）
家族	鉄道会社に勤務する夫と3歳の長女
経歴	近江兄弟社高校を経て、ICU国際基督教大学卒業 アメリカSIT大学院に留学、修士課程修了 日本マクドナルド㈱勤務を経て、社会人大学院生として青山学院大学　大学院博士課程に在籍中の平成13年、参議院議員選挙　比例代表（全国区）にて初当選（30歳） 宮中と全国の神社で毎年秋に斎行される「新嘗祭」の御神酒「白酒（しろき）」を謹醸する清酒「旭日」藤居本家の孫
役職	神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長 皇室の伝統を守る会国会議員の会事務局次長 日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会副幹事長 日本会議国会議員懇談会事務局次長 日本女性の会副会長

ありむら治子さんを応援する神社関係団体

全国神社総代会
神道青年全国協議会
全国教育関係神職協議会
全国氏子青年協議会
全国敬神婦人連合会
全国神社保育団体連合会
全国神社スカウト協議会

（続）浜の寄物

215

いしい ただし

三十日ほどたって、頭目の命令だろうか、黒坊たちが、我々を一人ずつ引離して、つれていった。

孫太郎はロロウと言う者の所へつれていかれた。みな別れ別れとなったが、近くだったので会うことができた。

家の造りは前と同じで、室内に籐蓆（むしろ）をしき、一家みんな一ヶ所に坐ったり臥せたりしている。床下は椰子木を敷並べ、家財等を置き、鍋釜の類は陶器で、鉄物はなかった。

朝夕の食べ物は、芭蕉子、蕃藷の類を、大きな鉢にもり、数人取囲んで、それぞれ片膝をたてて、手掴みで食べる。厠（かわや）は水上にありそれはどこの家も同じである。用を足した後は水浴をした。水辺から遠い所は、地面に厠をつくり、壺に水を貯えて、臀部（尻）を洗うが、必ず左手を用いた。黒坊の習俗（風習）は右手を貴び左手を賤むと言う。

家主のロロウは、毎日、孫太郎に籠をおわせ、蕃藷を採らせ、山野を歩く時には、初めのころ、孫太郎を前に歩かせ、牛馬を使うように後から笞（むち）をうった。

漁船をこがせ、トアイという貝採りもつれていった。すべて漁の船や小船の類も、巨木を刳ったものであった。梶（櫂）のみを使い、その梶の形は、三味線の撥（ばち）の様であった。

二十人の者達は、みな黒坊の奴僕（しもべ）となり、日がたつにつれ、水や土に合わないのか五、六人が病にかかり、一人が亡くなった。黒坊達は死骸に石を結びつけ、船に乗せて、沖へ漕ぎ出して海に沈めた。また二人が亡くなり、孫太郎らは海に沈めるに忍びず願はくば土に葬むってくれとたのんだが、土地が汚れると云ってとり合わなかった。

孫太郎らは集まって二人を担（かつ）ぎ出して、人家から遠く離れたところに埋めた。それは咎められなかった。死骸を海に沈めるのは水葬であり、天竺（てんじく）地方では古くからの習わしである。

その後、黒坊たちは三人を選んで、日本に返すと云ってつれて行った。残りの者は一緒にと願って頼んだが聞き入れず、いずこへ連れ去られたか、行方は分らなかった。船主重右衛門が亡くなり、土中に葬った。或日、藤蔵もつれて行かれた。

孫太郎は、この先どんなになるかと心細い毎日を送っていたところ、間もなく五人が次から次へと亡くなった。黒坊も心得て「マタイラ」（死の意）と触れ廻った。いずれも、生き残った者で土葬をした。

これまで九人が死に、四人は生き別れとなり残った者七人となった。

七月頃にソヲロクと云う国の商船が芭蕉子、陶物（やきもの）を積み交易にやってきた。この船が帰る時に、孫太郎ら七人は売られて、ソヲロクの船頭コロウが受取り、船に乗せられた。西にむかうこと十四・五日、ある時、水を汲むために陸に上ったところ、百余日前にカラガンで別れた藤蔵が粟を搗いているのを見つけた。「藤蔵元気かい」と呼びかけると、藤蔵はびっくりして「孫太郎やないか」と云って走り寄ってきた。しかし黒坊たちに呼びたてられ、話すひまもなく、再開を約して別れた。

フィリピン、ミンダナオ島にて

玄界の落日と、東南アジアの人形

ボルネオ（カリマンタン）にて

第五五〇回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

北九州市　八幡　吉田　ウト子

岩に堰かれせせらぐところ新らしき光を生みて春の水ゆく

評　歌意は平明だが、味わい深い一首であり、優作。もう一首の〈湿りもつ風に騒立つ樟若葉いかづち遠く北に聞きつつ〉もいい。

宗像市　大島　杉田　禮子

子供等も交じりて船を引き上げし浜なつかしきウインチ動けば

評　今は船の引上げも機械化されたのを見ての回想の歌だが、実情を知らない人には「ウインチ動けば」が唐突かも知れない。

宗像市　田野　森　甲子

惜しげなく散る成田山の桜花肩に浴びつつ回廊をゆく

評　逝く春を惜しむ至福のひととき。上句は「さくら花惜しげもあらず散る成田」もある。

宗像市　田久　巻　桔梗

裏方の美学知るどち「宗像大社短歌大会」の運営を継ぐ

評　今年から大社の手を離れて大会を切り盛りする事務局長としての決意と不安の一首、皆さんの是非のご協力を。

福津市　星ヶ丘　佐々木　和彦

対岸の赤土の上に音もなく降り立つ鷺は静止をすなり

評　「音もなく降り立つ」に鷺の特長をよくとらえていて、作者の目を感じさせる。

宗像市　日の里　大和　美由紀

電柱に睦まじき声ひと日して鵲の番は巣づくり励む

評　鵲の声を睦まじいとしたのは作者の発見である。

福岡市　南区　井田　有久衣

ケアルーム今日は翁の誕生会仲間の歌にそぞろ涙を

評　ケアルームのある日の出来事を詠ってほほえましいが、そぞろ涙を流したのは翁か作者かはっきりしない。「吾は流す」「翁は流す」と、はっきりしたい。

福津市　中央　池浦　千鶴子

孫のやうな子ら走り去る花の下風運びしか散りはじめたり

評　この歌も、ほほえましい状景であるが、上句と下句とがうまく結び付いていないのが残念である。気分が先行したのか。

北九州市　戸畑区　田中　ハツセ

ほのかなる藤の香りの流れくる玄関先の一本の藤

評　三句の「流れくる」は「を流しくる」ではないか、三句を原作のままとするなら下句は「玄関先に花ひらき初め」としたい。

宗像市　東旭ヶ丘　天野　玲子

間もあらず朝青竜が手をつけば座布団あまた宙に舞ひたり

評　先場所の白鵬との勝負であろう。一、二句は「朝青竜立合い一瞬」がいいのでは。

うきは市　浮羽町　向　則正

乗り継ぎて十六時間の飛行機にフランクフルトの一歩踏み出す

評　「一歩踏み出す」に、いやがうえにも高まる旅への期待が伺える。沢山の旅の歌を期待しています。

福津市　若木台　野間　精一

野苺の花の長けたるダムの岸卯の花の咲く季間近かなり

評　常に歌材を求めている人は季節の移りにも敏感である。その態度と目がとらえたダムの岸辺の風景である。

選者詠（小泉八雲旧居）

小さなる蕾のあまた寄り合ひて
紫陽花はまだ色あらはれず

北側の第二の庭とヘルン書きし
小池は菖蒲の紫映す

鳴きやみて睡蓮の葉にすがりたる
蛙の目玉太く明るし

第五二五回 俳句作品集

宗像市　光岡　白土　凌一

夏近しツバメ舞うかな大空に

宗像市　東郷　田中　憲象

石一つづつ裏返す磯遊び

宗像市　日の里　花田いつ枝

法螺（ほら）の音の沁み入る深山春惜しむ

編集後記

松坂投手が海を渡り、盛り上がりをみせる大リーグ。野球とベースボールの違いに戸惑っている様子が伝えられていますが、同投手に集中するメディアの注目を自身の活躍で逸らし、兄貴分として支えているのが一緒にレッドソックスに入団した岡島秀樹投手です▼小生も高校球児として白球を追った一人ですが、その当時一つ上の先輩で有名だったのが、京都・東山高校の岡島投手です。勿論、お会いしたこともありませんが、球の速さとコントロールの悪さが強烈だったのを記憶しています▼巨人、日本ハムでプレーされ、海を渡った訳ですが、入団時の評価も分かれていました。ところが開幕すると、得意のカーブにチェンジアップで、守護神バベルボンへと繋ぐ、貴重な中継ぎとして現在大活躍され、レッドソックスのダントツ首位を支えています▼松井（秀）選手が二つ上、岡島選手が一つ上、城島選手が同級生と同じ世代の選手が、環境も文化も異なる外国で活躍する姿は、住む世界の全く違う小生にも活力を与えてくれます▼神社界でも野球は盛んで、シーズンになると全国各地で県や地区単位で野球大会が行われています。その全国規模の「第三十一回東西神社人野球大会」が、太宰府天満宮と当大社の当番により今夏福岡で開催されます。本格的な練習も始まっていますが、例年より熱い夏になりそうです。（M・O）

発行所　宗像大社社務所
宗像会

〒811-3505　福岡県宗像市田島
電話　0940-62-1311（代）
発行人　葦津幹之
編集人　大塚宗延
制作　ゼネラルアサヒ
印刷　ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円